15　次の文を読んで、後の問に答えよ。　　　　〈京都大〉二〇二一年度出題

　もうかれこれ三十何年も前の話である。当時、私は京都大学の学生で、北白川に下宿し、やはり東京から来て同じ区域にいた何人かと特に親しいグループを作っていた。（今でも親しくつき合っている。）いずれもな者ばかりだったが、ただ兄貴株の山崎深造だけは別であった。彼はおだやかな、思いやりの深い、そして晴れやかな落着きを感じさせるような人間で、時にはかなり辛辣な皮肉も言ったが、不思議に少しも嫌な気持が起らなかった。彼だけは既におとなであった。

　京都へ来て二年目の六月に、私は熱を出し、ブスの疑いがあるというので入院させられることになった。

　そのとき彼は、私のがあまり汚れているというので、自分のを分けて貸してくれた。そして入院の手続きから必要な買物まで、万事世話をしてくれた。幸いチブスではないとわかって、半月程して退院したが、医師のすすめで、そろそろ始まる夏休みには東京へ帰らずに郷里で保養することにした。それで、退院の直後、私は彼の下宿の部屋で雑談しながら、郷里の海や景色の美しさ、軽いボートを操って釣をしたり泳いだりして遊ぶ楽しさのことなどを、はずんだ気持で、調子づいて話していた。その時、彼は突然軽く笑いながら、一言、「君も随分おぼっちゃんだなア」と言った。そそれが私には「忘れ得ぬ言葉」になってしまった。彼はその言葉を嘲りや嫌味の気持で言ったわけではない。彼はそういう、自分自身を卑しめるたぐいのことは、もともと出来ない人柄であった。だから、単にからかい半分の軽い気持で言ったに違いない。しかしそれを聞いた私にとっては、その一言は何かハッとさせるものをもっていた。私はその時の自分の心が自分自身のことで一杯になっていて、彼の友情、彼が私のために払ってくれた犠牲、についての思いが、そこに少しも影を落していないことに気付かされた。しかもその時の自分のそういう心持というばかりでなく、自分というもの、それまでの自分の心の持ち方というものが、鏡にうつし出されたかのような感じであった。いわば生れてからこのかたの自分に突然サイド・ライトが当てられて、それまで気が付かなかった自分の姿に気が付いたというような気持であった。彼の眼には、散々厄介をかけながら好い気持でしゃべっていたわたしが、罪のない無邪気なおぼっちゃんと映ったに違いない。しかしその一言によっ私の眼には、その自分の「罪のない」ことがそれ自身罪あることと映って来たのである。それは眼が開かれたような衝撃であった。実際に、私はそれ以来自分がおとなの段階、はおとなに近い段階に押し上げられたと思っている。

　実はそれまでにも高等学校の頃など、時たま友人達から「世間知らず」とか「おぼっちゃん」とか言われたことがある。兄弟姉妹というものをもたない独り子として育ったので、そういうところが実際あったのかも知れない。しかしそういう場合いくら「世間知らず」といわれても、んどを感じなかった。というのは、少年の時に父親を失って以来、物質的にも精神的にもいろいろな種類の苦痛をめて、いわば人生絶望の上を歩いているような状態で、批評した友人達よりはずっと「世間」の何たるかを知っているという気持だったし、同時にまたそういう「世間」的なものを、十把一からげに自分の後にして来たような気持だったからである。しかし今度はまるで違ってい今度は、自分が、以前に言われたとは全く別の意味において「世間知らず」であったことを知った。という事は、裏からいえば、山崎の友情が私に実感となることによって、私は彼という「人間」の存在に本当の意味で実在的に触れることが出来、そして彼という「人間」の実在に触れることにおいて、本当の意味での「世間」に実在的に触れることが出来たということである。他の「人間」に触れ、彼とのつながりのなかで自分というものを見る眼が開けて初めて、普通に世間といわれるような虚妄でない実在の「世間」に触れたように思う。自分というものにサイド・ライトが当てられたのと世間というものを知ったのとは同時であった。それまでは、本質的な意味で「世間知らず」であり、同時に「自分知らず」であった。ずっと後になって考えたことだが、仏教でよく「縁」と言うのは、今いったような意味での人間とのつながり、又あらゆるものとのつながりのことではないであろうか。それはともかく、そういう意味で「人間」に触れ、「世間」に触れたことが、絶望的な気持のなかにいた当時の私には、何か奥知れぬ所から一筋の光が射して来て、生きる力を与えてくれるかのようであった。

　それにしても、ほんのちょっとした言葉が「忘れ得ぬ」ものになるのだから、言葉というものは不思議なものだと思う。現代のマンティックスの人々や理実証主義の哲学の人々が何と言おうと、言葉の本源は、生き身の人間がそれを語るというところにある。忘れ得ぬ言葉ということは、他人が自分のうちへ入って来て定着し、自分の一部になることだろうが、そのなり方はいろいろである。書物から来た言葉の場合には、どんなに深く自分を動かしたものでも、それが繰返し想起されされているうちに、初めそれが帯びていた筆者のマークがだんだん薄れてくる。言葉の抽象的な意味内容だけが自分のうちに定着して、血肉に同化したかのように自分のうちへ紛れ込んでしまう。ところ言葉が生き身の人間の口から自分に語られた場合は、全く別である。その場合には言葉は、それを発した人間と一体になって自分のうちへ入ってくる。それが忘れ得ないものになるという時には、独立した他の人間がその人間としての実在性をもって自分のうちに定着し、自分とつながりながら自分の一部になる。彼の言葉は自分のうちで血肉の域を越えて骨身に響くものになってくる。それが忘れ得ぬ言葉ということである。その言葉が想起されるたびに、言葉は語った人間の「顔」、肉身の彼自身、を伴って現われてくる。そしてその言葉を反芻するたびに、我々は我々の内部でその彼の存在の内部へ探り入り、彼を解読することになる。それによって彼はますます実在性をもってもくるし、同時にまたますます我々自身の一部にもなってくる。つまり、言葉は人間関係の隠れた不可思議さを現わしてくる。

　私にとって、山崎の場合がまさしくそうであった。彼と彼の言葉を思い出すに、彼はますます私に近付いてくるようでもあるし、私がますます彼のなかへ、もはや何も答えない彼という「人間」の奥へ、入って行って、彼を解読しているようでもあ生きているとか死んでいるとかという区別を越えた、そういう人間関係は、夢のような話と思われるかも知れないが、私にはいわゆる現実よりも一層実在的に感ぜられるのである。明日には忘れられる「現実」よりも、何十年たってもますます実感を増すものの方が一層実在的ではないだろうか。本当の人間関係はそういう不思議な「縁」という性質があり、人間とはそういうものではないだろうか。

（西谷啓治「忘れ得ぬ言葉」〈一九六〇年〉より。一部省略）

注（＊）

チブス＝チフスのこと。

セマンティックス＝意味論。言語表現とその指示対象との関係の哲学的研究を指す。

論理実証主義＝二〇世紀初頭の哲学運動。哲学の任務はもっぱら科学の命題の論理的分析にあるとする。

問１　傍線部（１）について、なぜ「忘れ得ぬ言葉」となったのか、説明せよ。

問２　傍線部（２）はどういうことか、説明せよ。

問３　傍線部（３）はどういうことか、説明せよ。

問４　傍線部（４）のように筆者が言うのはなぜか、説明せよ。

◎問５　「本当の人間関係」について、傍線部（５）のように言われるのはなぜか、説明せよ。

【解答と採点基準】

問１　Ａ信頼を寄せる友人からの率直な指摘によって、Ｂ周囲への配慮を欠いた自分の態度に気付き、衝撃を受けて、Ｃ今までの心の持ち方や無自覚な在り方を見つめ直す機会を得たから。

Ｃの内容がなければ全体０。

Ａ＝３〔「信頼を寄せる」のような「友人」を説明する内容がなければ減点２。「率直な」に当たる内容がなければ減点１。〕

Ｂ＝４〔「他者への配慮の欠如」という内容は必須。「衝撃を受けた」という内容がなければ減点１。〕

Ｃ＝３〔「今までの」という内容がなければ減点１。「心の持ち方」「無自覚な在り方」のどちらかの内容があれば可。文末が理由（「～から。」）になっていない場合は減点１。〕

問２　Ａ友人に面倒をかけたことに無自覚なまま夢中に話し続ける、悪意のない無邪気さは、Ｂ他者への配慮を欠いている点で、Ｃ利己的な在り方だと気付き始めたということ。

Ａ・Ｃの内容がなければ全体０。

Ａ＝４〔「無邪気さ」という意の語がなければ減点１。「無邪気さ」についての具体的な説明は必須。〕

Ｂ＝３〔「他者への心遣いの欠如」という内容であれば可。〕

Ｃ＝３〔「利己的」「自己中心的」など「罪」に当たる内容は必須。〕

問３　Ａ世の苦労を知らないという通俗的な意味ではなく、Ｂ生き身の人間の実在に触れ、人とのつながりの中で自己を見出したことで、Ｃ実在の世間を知らずにいたと自覚したということ。

Ａ・Ｂの内容がなければ全体０。

Ａ＝３〔「世間一般の苦労という意味ではなく」という内容であれば可。「通俗的」「一般的」などの語がなければ減点１。〕

Ｂ＝５〔「生き身の人間の実在に触れた」「人とのつながりの中で自己を見出した」という要素がなければ、それぞれ減点２。〕

Ｃ＝２〔「実在」は「本当」や「真」など、Ａとの対比があれば可。〕

問４　Ａ書物の言葉は、やがて筆者の実在性が失われ、抽象的な意味内容だけが自分の中に定着するが、Ｂ生き身の人間の言葉は、次第に自分の中に他者が実在性を持って定着し、Ｃ想起するほどに存在感を増して働きかけてくるから。

Ａ・Ｂの内容がなければ全体０。

Ａ＝４〔「筆者の実在性が失われる」「抽象的な意味内容だけが定着する」という要素がなければ、それぞれ減点２。〕

Ｂ＝３〔「他者の実在」に当たる表現は必須。〕

Ｃ＝３〔「想起」は「反芻」でも可。文末が理由（「～から。」）になっていない場合は減点１。〕

問５　Ａ本当の人間関係とは、ある人の発した「忘れ得ぬ言葉」を想起し反芻するたび、自分の内部でその人への理解が深まり、Ｂその人がいるいないにかかわらず、実在性が増すという意味で、Ｃ目の前の現実を越えて強く実感されるから。

Ａ・Ｂがなければ全体０。

Ａ＝４〔「想起」「反芻」どちらもなければ減点２。「言葉を発した人への理解が深まる」という内容は必須。〕

Ｂ＝４〔「言葉を発した人が死んでも実在性が増す」という内容であれば可。〕

Ｃ＝２〔「現実を越えて実感される」という内容であれば可。文末が理由（「～から。」）になっていない場合は減点１。〕